

日中科学技術

No. 129-130
2009.10.20

発行所

特定非営利活動法人 日中科学技術交流協会

〒103-0003 東京都中央区日本橋横山町 3-1 横山町ダイカンプラザ 403 号

E-mail : jcstea@alpha.ocn.ne.jp

URL : <http://www13.ocn.ne.jp/~jcstea/>

電話 : 03 (6431) 0456

Fax : 03 (6431) 0466

香港專業教育學院學生來日交流会

2009 年 4 月 7 (火) 於 東京大学山上会館



日中科学技術交流協会は、昨年に引き続き、香港職業訓練局 VTC (Vocational Training Council) の協力要請を受け、香港專業教育學院 (Institute of Vocational Education IVE) 学生他 64 名と東京大学中国人留学生学友会との交流会を 2009 年 4 月 7 日 (火) 午後、東京大学本郷キャンパス山上会館で開催した。

当協会からは、山脇副理事長、藤崎副理事長、広瀬東京大学教授、藤田東京大学教授、永崎事務局長が出席し、山脇副理事長が歓迎の挨拶を述べた。

中国留学生学友会からは、葛星副会長、趙玉亮 Zhao Yuliang 対外連絡部長他 10 名が出席し、葛副会長が挨拶を述べた。

交流会の後、一行は学友会の案内で東京大学キャンパスを見学した。



中国人留学生を紹介する趙玉亮君



山脇副理事長、



葛副会長へ

香港職業訓練局から贈品

(永崎隆雄 記)

上海科学技術協会の来日 電機工業会と交流

2009 年 4 月 21 日（火） 於 日本電機工業会

上海科学技術協会では金融危機に対して企業をサポートするため、上海の大中の私営メカに企業科学技術の活性化を促進する協会の設立を奨励し、推進している。

この度、日中科学技術交流協会に対して「日本の企業組合を訪問し、産業協会運営の経験を学びたい」旨の申し出があり、各種業界団体の協会や連盟に交渉した結果、日本電機工業会が受け入れを受諾し、4月21日午前、電機工業会（JEMA）にて情報交換を行った。

1. 中国側出席者

- ①曹培新 Cao Peixin 団長
上海市科学技術協会国際部 幹部
- ②袁鵬斌 Yuan Pengbin
同上 副主席
(中国海隆石油工業集団常務取締役)
- ③李連栄 Li Lianrong
同上 コンサルタント部 部長
- ④傅 勇 Fu Yong
科学技術創新服務部 副部長
- ⑤宋洪波 Song Hongbo
科学会堂 副主任
- ⑥沈 燕 Shen Yan
上海市金橋輸出加工区管理委員会
事務局 主任助理

2. 日本側出席者

- ①河上保 電機工業会 企画部長
- ②柴田洋二 同 原子力部長
- ③中村大介 同 企画部主任
- ④小谷雅子 同 国際部グループ
- ⑤戸谷俊二 同
- ⑥永崎隆雄 当協会 事務局長

3. 意見交換の概要

①上海市科学技術協会の概要説明

上海市科学技術協会は、上海市 183 の社団法人と 73 の科学技術学会の統括部門で 20 万人の会員、53 の企業会員から構成され、政府の指導を産業界や学会に徹底させ

る役割と会員との交流を深める組織である。

上海市科学技術協会では、学術協会と産業協会を分けておらず、職員予算は、国から来る。各種学会の統括、期刊書の発行、海外の出版物の収集、会員企業の科学技術に関する諮問、上海万博の取り纏め、技術者の人材交流等を行っている。企業との連携が強く、ビジネス展開が速い協会である。

毎年 10 名のミッションを日本の大学、研究所に派遣している。



前列左より永崎氏、曹詩、河上氏、袁氏

②JEMA の概要説明

- 中国家用電器協会と交流している。
- JEMA は指導機関ではない。会員会社のまとめ役。
- 設立 60 年、産業発展と国際化に貢献した。
- 製品は重電から白物家電まで。
- 正会員 200 社、賛助会員 100 社。
- 海外の電器産業との交流を行っている。
- 政府の景気対策では、省エネ家電の買い替え補助金を交渉中。
- CDM のペイバック制度など推進。
- 日中韓台印豪でアジア太平洋州重電系工業会 FAEMA を作った。
- 国際標準化の推進を行う。

③質疑応答

- JEMA 予算は誰が出すか？⇒会員会社。政府の委託調査収入がほんの少し。

- JEMA 規格と JIS 規格⇒JIS は国。JEMA は民間規格だが、JIS にもなる。
- 評価活動は、政府か自主か？⇒政府の評価委員会に JEMA から人を送り込む。
- 正式会員と賛助会員⇒前者は国内に工場を持つ。後者は商社等で会議などに参加は出来ても表決権ない。
- 中国企業でも賛助会員になれる。



6. 当協会主催による歓迎宴

歓迎宴は、山脇副理事長、中河正勝 K J S ネット社長、中平弘元住友原子力工業副社長、永崎事務局長が参加し、JAEA 青山分室にて開催した (下の写真)。



(永崎隆雄 記)

2008 年度共同研究等の報告講演会

2009 年 6 月 3 日 於 JAEA 青山分室

北京オリンピック前後の大気汚染物質濃度 グリーンブルー (株) 取締役 皆川直人
中国の原子力発電設備製作の発展 日中科学技術交流協会 事務局長 永崎隆雄

当協会は、6月3日(水)第6回総会后、2008年度に実施した下記の2件の業務について、報告会を実施した。

- ① 北京の大気環境測定共同研究
- ② 中国原子力設備製造業者交流(3月)

1. 北京オリンピック前後の大気汚染物質濃度 皆川直人氏

①はじめに

中国北京オリンピックは2008年8月8日～24日に開催され、期間中は北京市内への自動車の乗入れ禁止等の交通規制、さらに近隣の工場の作業停止等、大気汚染に係る様々な規制が行われた。我々はパッシブサンプラーを使用し、オリンピック開催前後の北京市内の大気汚染濃度測定を行った。

②調査内容

(1) 調査期間はオリンピック開催前(2008年8月18日～26日)、開催後(2008年10月24日～31日)ともに各1週間とした。
(2) 調査地点は、開催前は北京市内4地点と青島2地点、開催後は、北京市内3地点であり、北京市内は、いずれも地図中の清華大学構内とした。

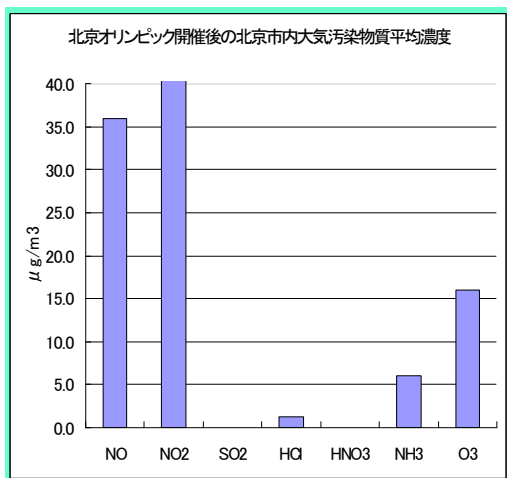
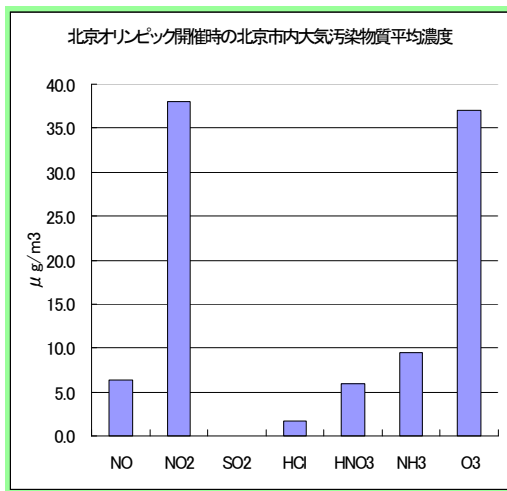


(3)調査方法はパッシブサンプラーを使用して大気汚染物質 7 成分 (NO, NO₂, SO₂, HCl, HNO₃, NH₃, O₃)、揮発性有機化合物 (VOCs) 10 成分及びアルデヒド類 8 成分の測定を行った。

③結果及び考察

オリンピック開催前後の各成分濃度は、開催前後の 3 地点 (北京 (CAS)、清華大学、北京 (弁公室)) の平均濃度で比較を行った。

大気汚染物質濃度の比較は図示した通り開催後の濃度が開催前を上回った成分は、NO、トルエン、ベンゼンの自動車排ガス由来の 3 成分であり、オリンピック開催間際から開催中の交通規制の影響と考える。特に NO 濃度は開催前に比べ開催後は 3 地点ともに 5 倍前後高くなっていた。



また、開催前が開催後を上回った成分は O₃、エチルベンゼン、o-キシレン、ホルムアルデヒド及びアセトアルデヒドの 5 成分であった。これらは室内等の建設資材に関する成分であり、オリンピック間際まで建設工事が行われていたことを示唆する。

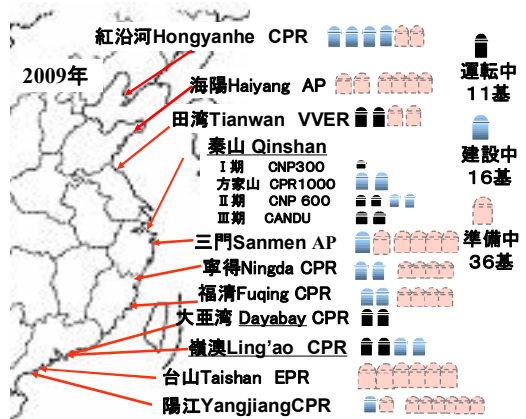
開催前後の代表的な成分相関は、相関係数が 0.7 以上の組合せは NO-O₃、トルエン-1,2-ジクロロプロパン、トルエン-キシレン等の 8 組であり、特に 1,2-ジクロロプロパンとトルエン、エチルベンゼンは各々 0.95、0.93 と良好な相関が得られた。これらの成分はいずれも室内資材、塗料関連成分であった。以上のことから、オリンピック開催間際から開催中にかけての工場の操業停止や交通規制が各成分濃度に大きく寄与していた。

2. 中国の原子力発電設備製作の発展

永崎隆雄氏

中国の原子力発電所建設は、急増している。

2008年11月には国家発展と改革委員会エネルギー局の張局長は、運転設備容量目標を2020年40GWから60GW(100万kW60基)に上方修正し、さらに今年はさらに70GWに上方修正している。現在運転中の原子力発電は、11基9.1GWで、建設中は13基12.3GWである。



建設期間は約 5 年であることを考えれば、40~50GW を 2015 年頃までの 7 年間に着工しなければ、目標運転容量には達しない。これには年間 6~7 基という大量の設備生産能力を持たねばならず、現状の年間 2~3 基の能力を倍増する必要がある。

このため、原子力発電設計製作体制の整備がなされている。設計、仕様作成、部材購入、施工管理、設備製造監督、運転技術支援等を総合的に行う 3 つのエンジニアリング会社が形成された。

- ① 中国核電工程公司
元北京核工程設計院 核工業集団系
- ② 中広核工程有限公司
仏導入炉の国産化 広東核電系
- ③ 国家核電技術公司
米国導入 AP1000 の国産化
上海核工程研究設計院

設備製造は、3 大原子力製作メーカを重点に工場の集中化や臨港部移転などを下記の通り行っている。

- ① **上海電気**
臨港部へ原子力重工工場を集中移転
- ② **東方電気**
四川省徳陽に集中化
重型設備工場を広州南沙に移転
仏アレバ社との協力関係強化
- ③ **ハルビン電気**
ハルビンの工場を整備
重型設備工場を秦皇島に移転

日中科学技術交流協会では 3 月 23 日から 27 日に下記の 3 つの中国の原子力設備工場を訪問し、設備製造状況や増強計画やその課題、日中協力の可能性について意見交換した。

- 1) 上海電気重工集団 臨港工場
- 2) 東方タービン 徳陽工場
- 3) 東方電気広州重型機器 南沙工場

- 1) **上海電気集団 重工集団臨港工場**
上海市臨港地域に大型重量設備工場

を移設し、他の設備製作と集約化し大規模化している。

- 1 次系設備生産：年間 2.5 基分へ
- 2 次系設備生産：年間 4.5 基分へ

関行+臨港 全投資額 61 億元

関行基地：熱処理と鍛造

臨港基地：大型設備と超重量部品



2) 東方電気 東方タービン徳陽工場

工場は、四川省徳陽市と漢旺市にあった。しかし、漢旺工場は四川地震の被害にあって壊滅した。そのため、徳陽に移転し、大規模集約新工場を建設中。設計製作能力は以下の通り。

- タービン：100 万 kW 年 4 基
20、30、60 (80 年代日立協力)
100 万 kW (嶺澳 1905 年仏アルストム社設計)
- 100 万 kW 原発主設備：
原子炉圧力容器、蒸気発生器、加圧器、
ホウ素注入タンク、蓄圧注入系タンク、
汽水分離器
- その他：超臨界タービンと ABWR (日立と接触協力)

東方タービン徳陽の新工場建設中



3) 東方電気 (広州) 重型機器工場

仏から導入した加圧水型原子炉 CPR1000 の国産化を目指して、2004 年 5 月に設立された。場所は、広州南沙区黄閣工業園にある。輸出輸送の容易さからここを選定。総投資額は 13 億元 (200 億円)。



共同出資者は、東方電気集団、広東省粵電集团有限公司、広州南沙化工投資有限公司、広州広重企業集团有限公司、中国第二重型機械集団公司。

工場土地面積は、40 万㎡。製造能力は以下の通り。

- 100 万 kW 原発 PRZ : 年 2 基
- 压力容器、反応炉支持環等 : 年 800t
- 台車式熱処理炉 9m×4.5m×3.5m
- 埠頭能力 : 3000t 級船舶
- クレーン最大吊上能 1400t
15m×9m×8m
- 華南地区と全国重大装備製造企業

4) 東方電気武漢核設備工場

長江と漢江の要衝、武漢に仏技術で炉内構造物と各種容器工場を建設中。

東方電気集団の合計

- 1 次系設備生産 : 年間 3 基へ
- 2 次系設備生産 : 年間 4 基分へ

5) ハルビン電気集団

渤海湾の秦皇島に核電重型装

備工場を新設し、A P 1000 対応で増強中。2008 年仏 Vanatom 社から原子力用バルブ技術を導入。

1 次系設備生産 : 年間 2 基分

2 次系設備生産 : 年間 4 基分へ増強中。

6) 第一重型機械集団

原子炉压力容器の鍛造を黒竜江省チチハルで行っているが、大型設備製造装置を臨港部の大連綿花島核電設備製造基地へ拡張移転。2009 年 6 月より現場据付に入った。これが完成すれば、

CPR1000 の 1 次系 年 2 基生産

EPR1700 の 1 次系 年 1 基生産



7) 中国が達成する合計製造能力

1 次系設備 : 年間 10.5 基分

2 次系設備 : 年間 12.5 基分

8) 原子力設備メーカーの当協会への要望

これらの工場の設備は最新鋭に更新されてきたが、工場の運営、品質管理、T Q A の能力、経験が不足している。日本の経験豊かな人材を当協会に紹介してほしい旨、依頼があった。



広東省科学技術庁訪日交流団受け入れ報告

日中科学技術交流協会副理事長 山脇道夫

2009年6月10日－6月13日



当協会は、6月10日(水)より6月13日(土)の間、広東省科学技術庁と関連研究所の幹部からなる訪日交流団を受け入れ、主要研究機関へ同行案内するとともに、当協会との交流を深めました。発端は、広東省科学技術庁より、山脇副理事長を通じて当協会に対し、日本の先端科学技術分野で主要な研究機関への訪問交流をアレンジしてほしいとの依頼が寄せられたことでした。それを受けて、東京大学並びに産業技術総合研究所(AIST)への訪問交流を段取りするとともに、当協会との交流会を開催しました。

1. 広東省からの来訪者

- 1) 葉景図 広東省科学技術庁 副庁長
- 2) 周海涛 同上 副処長
- 3) 曾宜軍 同上 人事庁 副主任科員
- 4) 張勁松 広東省政策研究院 院長
- 5) 邱頭揚 広州有色金属研究院 院長
- 6) 顔国榮 同上 副総経済師

2. 訪問先

- 1) 東京大学 メインキャンパス
- 2) 日中科学技術交流協会
- 3) 産業技術総合研究所 筑波本部

3. 問先での面会、視察、討議内容

(1) 東京大学本部ならびに工学系研究科

日時：2009年6月11日(木)午後

広東省側参加者6名に加え、協会側から、藤崎副理事長、山脇副理事長、田岡会員、矢形会員と通訳1名が参加しました。

始めに、東大本部棟会議室において、東京大学の貴志国際系総括長と川野辺国際企画グループ長から、歓迎の挨拶と東京大学の概要の紹介がありました。大学の活動状況の説明では、訪問団側が興味を示した研究経営面に重点が置かれました。

次に、研究現場の視察のため、工学系研究科に移動し、まずIRT研究機構において、プロジェクトマネージャの松本特認教授から、最新のロボット工学の成果について実物のデモンストレーションを交えて説明を受けました。



その後、グローバルCOE「機械システムのイノベーション国際拠点」を訪問し、代表の光石教授から、開発中の先端的機械システムについて実物により解説してもらいました。

（2）日中科学技術交流協会

日時：2009年6月11日（木）午後

協会側からは、有山理事長、藤崎副理事長、山脇副理事長に加え、会員10余名が参加し、東京大学山上会館会議室において交流会を開催しました。

3件の講演が行われました。

1) 広東省の科学技術・産業振興計画と日本への期待

広東省科学技術庁 副庁長 葉景図

2) 日中科学技術交流協会の活動と展望

当協会理事長 有山正孝

3) 東京大学における産学連携の情況

東京大学産学連携本部 知的財産部長・教授 小蒲哲夫

葉副庁長の講演では、広東省の科学技術開発の情況について詳細に説明され、広東省が中国の中で非常に大きな存在感を持つ省であることが示されるとともに、発展への意欲が大変強く漲っていること、また日本への期待が大きいことを強く印象づけるものでした。小蒲教授の講演に対しては、広東省側から活発な質疑と討議が行われ、訪問客側のこの方面への関心の強さを示していました。



6時半からは、場所を医学部内レストランに移して懇親会が催され、和気藹々の雰囲気の中で歓談が交わされ、交流の実を挙

げるとともに、今後の更なる協力を約しました。



（3）産業技術総合研究所筑波本部（AIST）

日時：2009年6月12日（金）午前

協会側からは、山脇副理事長、岡田理事、若槻前理事、唐会員と通訳1人が参加しました。

まず、本部会議室において、宇都国際部門長、橋本国際部門総括主幹より、歓迎挨拶とAISTの組織や研究経営の概要について紹介がありました。広東省訪問団から研究経営に関して活発な質疑と討議がなされました。

次いで、サイエンススクエアという展示場へ移動し、先端的な研究成果について説明を受け、その後、近くのレストランで昼食を取り、当協会と広東省訪問団との交流が行われました。

以上のように、本来日団の受け入れは、中国の訪日交流希望団体に対して当協会が、国内研究機関訪問のアレンジを世話するとともに、当協会との交流も同時に進めたもので、これまでにない新しいスタイルの交流事業になったと自負しています。今後、類似の交流を活発に行うことができれば、当協会の発展につながると思われますので、そのような訪日交流希望を持つ団体をご存知でしたら、是非情報をお寄せください。

科学院招待青年訪中団報告

日中科学技術交流協会事務局長 永崎隆雄

2009年8月17日～22日 上海 合肥 北京



当協会では、中国科学院の招待で、青年訪中団を募集し、科学院の誇る大型科学実験施設を視察し、路全国人民代表会議常務委員会副委員長・科学院院長に会見した。視察状況等について、報告する。

1. 目的

- 中国建国60周年を記念し、中国の科学技術の発展を見る
- 日中科学技術交流30年の成果を総括すると共に今後の両国の科学技術協力を図る。

2. 日程

- 8月17日（月）上海着
 8月18日（火）上海
 ● 上海シンクロトン放射施設
 上海光源
 8月19日（水）合肥
 ● プラズマ物理研究所 超伝導核融合試験装置EAST
 ● 科学技術大学
 8月20日（木）北京
 ● 科学院 国際合作局
 ● 人民大会堂
 路甬祥科学院院長

3. 招待者

招待者は、科学院の要望に応じ、優れた業績を持つ若手研究者を有山理事長（電気通信大学）、山脇副理事長（東京大学、京都大学、JAEA）、井形理事（東京理科大学）に推薦していただいた。

又、科学院からの指名で坂田昌一先生（戦後の日中科学技術交流の基礎を固められたが、当協会設立前の1970年に病のため逝去された）のご子息坂田文彦先生とその推薦若手研究者を団員に加えた。

学生会員活動の活性化のために学生2名を参加人員に加えた。

（参加者）

- | | |
|---------|---------------------------|
| 1. 有山正孝 | 当協会理事長 |
| 2. 有馬朗人 | RI協会理事長
元文部科学大臣 |
| 3. 坂田文彦 | 茨城大学理学部学部長 |
| 4. 高妻孝光 | 同上大学院理工学研究科
応用粒子線科学 教授 |
| 5. 奥野剛史 | 電気通信大学量子・物質
工学科 准教授 |
| 6. 谷口淳子 | 同上 助教 |
| 7. 曾我公平 | 東京理科大学基礎工学部
材料工学科 准教授 |

8. 笠田 竜太 京都大学エネルギー理工学研究所核融合炉材料助教
9. 藤田 豊久 東京大学大学院工学系研究科地球システム工学専攻教授
10. 小田 卓司 同上原子力国際専攻助教
11. 金野 智浩 同上・バイオエンジニアリング特任准教授
12. 矢形 朋由 東京大学大学院 原子力国際専攻 博士課程
13. 成川 隆則 同上教養学部文科 1 類
14. 春日 井敦 原子力研究開発機構 那珂核融合研究所研究主幹
15. 永崎 隆雄 協会事務局 事務局長

4. 報告

(1) 上海同歩輻射光源 (Shanghai Synchrotron Radiation Facility)

茨城大学理工学研究科 高妻孝光

中国側出席者

- 維平 Chen Weiping
中国科学院国際合作局亜非処 処長
- 張清泉 Zhang Qingquan
同上
- 陳慧芬 Chen Huifen
中科院上海分院外事主管
- 邵仁忠 Tai Renzhong
上海光源 同歩輻射実験部副主任
- 将舸楊 Jiang Geyang
同上 束測制御部 副研究員
- 夏曉彬 Xia Xiaobin
同上 技術安全部 主任
- 黄勝 Huang Sheng
同上 副研究員
- 劉衛 Liu Wei
上海応物所 核分析室 研究員
- 懷平 Huai Ping
同上 核物理研究室 研究員

シンクロトロン放射光は、X 線領域から遠赤外線領域までの広い波長範囲を持つ光であり、化学、物理、医療、薬学、考古学、地質学等において大きく利用されている。

上海には、中国科学院応用物理研究所が

あり、この応用物理研究所と民生用核技術研究所を基礎として、第 3 世代のシンクロトロン放射光施設が 2009 年 4 月 29 日に竣工し、2009 年 5 月 6 日にユーザーに公開された (2004 年 12 月 25 日に着工)。このシンクロトロン放射光施設は、上海光源と略称され、日本、インドにある第 3 世代のシンクロトロン放射光施設とともに、アジアにおけるシンクロトロン放射光源の一翼を担うことが期待されている。

世界で最も新しく建設された第 3 世代上海光源は、総工費 12 億元 (日本円換算 180 億円) を要した中国最大の科学実験施設 (装置) である。上海光源は、オウムガイのモチーフによってデザインされ、モダンな様相を呈している。おそらく世界でも最も美しくデザインされたシンクロトロン放射光施設といえる。下写真



上海光源の玄関には、上海光源の模型が設置され、その概要をすぐさまうかがい知ることができるようになっている。下写真



上海光源スタッフである邵仁忠博士の施設説明の後、光源内部の見学を行なった。内部は、広めで明るいハッチホールがあり、多くのビームラインからの光の取り出し口が、いろいろな分析装置の設置を今や遅しかと待っている状況であった。

上海光源は、2009 年 7 月 19 日には、3.5 GeV、300 mA の出力を達成した。上海光源では、X 線吸収スペクトル、X 線小角散乱、

X 線結晶構造解析等の基本の 7 つのビームラインが、現在設置されている。2009 年 3 月の段階において、78 の機関から 301 の課題が提案され、ビームタイム 2868 シフトがアサインされている（1 シフトは 8 時間）。ほぼ中国全土からの課題提案が行なわれており、分野別では、生命科学が 21% と最も多く、次いで材料科学、化学の順となっている。しかし、構造生物学の課題 11% は生命科学利用には含まれていないため、これを生命科学に加算すると約 30% が生命科学の課題利用となっており、中国においても、医療、創薬におけるシンクロトロン放射光利用の重要度が高いことを窺い知ることができた。2010 年～2012 年で、さらにユーザー設置のビームラインが 6 本計画され、また、自由電子レーザーの建設も同時に進められる予定である。2015 年くらいをめどに、新たな 24 本のビームラインが、そして、2020 年くらいを目途に、さらに 18 本のビームライン設置が計画されている。



ここ上海光源においては、中国独自に開発、製造した装置、部品がふんだんに活用されており、中国の科学技術の高さをあらためて直視することのできたよい機会となった。

郜仁忠博士はフォトンファクトリーで博士号を取得しており、多くの上海光源スタッフが、日本での留学経験や研究員としての経験を有しているとのことであった。劉衛博士は九州大学に留学経験を有し、炭酸ガスの循環過程を ^{14}C を用いて研究したとのことであった。その研究経験が、今や、上海における大気環境の調査等に役立つ

ていると話され、日中における交流事業の大切さを強調されていた。

(2) プラズマ研究所 超伝導核融合実験装置 EAST (科学院等離子体物理研究所)

ASIPP: Institute of Plasma Physics, Chinese Academy of Sciences

春日井 敦、小田卓司、笠田 竜太

中国側 出席者

- 1) 肖炳甲 Xiao Biangjia
- 2) 鐘國強 Zhong Guoqiang
- 3) 凌必利 Ling Bili
- 4) 羅広南 Luo Guangnan
- 5) 林 他



中国科学院合肥物質科学研究院に属する五つの研究所の一つであるプラズマ物理研究所 (ASIPP: Institute of Plasma Physics, Chinese Academy of Sciences) を訪問した。中国科学院は、全国に 120 の研究所を有する。ASIPP は 1978 年 9 月に設立され、核融合発電を実現するための基礎研究を行っている研究所である。主にトカマク型プラズマ実験装置を用いた磁場閉じこめ核融合と高温プラズマ物理を研究し、核融合工学技術開発や原型炉の設計を行っている。研究所には職員約 450 名 (平均年齢は 42 歳)、大学院生 396 名が在籍する。2006 年 1 月に超伝導トカマクである EAST (Experimental Advanced Superconducting Tokamak) を建設し、2006 年 9 月にファーストプラズマの着火に成功している。今回の訪問では、ASIPP における研究開発に関してプレゼンテーションを受けた。その後、EAST 装置及び超伝導コイル開発施設を見学した。

1) ASIPP における研究開発

- ・ EASTは物理実験と工学技術の取得を目的としている。
- ・ 2006年1月完成、2006年9月ファーストプラズマ
- ・ ダイバータプラズマにおいて、8秒程度の放電実験を行った。
- ・ 長時間運転と物理の面でITERへの貢献を期待でき、EASTは中国国内の核融合関係者だけでなく、国際的にも開かれた装置である。
- ・ EASTではフェーズIIおよびフェーズIIIが計画されており、加熱装置の増強等によりプラズマ性能の向上と長時間運転を目指している。
- ・ 中国はITERへの参加国であり、ASIPPは中国国内の拠点として活動している。
- ・ ASIPPはITERへの貢献として、主に超伝導フィーダー、補正コイル、超伝導導体、キャスクシステムなどで調達を担当する予定である。
- ・ 超伝導コイルの製作や電流リード開発、核解析などをASIPPで行っている。
- ・ EASTの次期計画として、国内装置のFDS-II (核融合試験炉)、FDS-I (核融合駆動未臨界炉)、FDS-ST (多目的に使用できる球状トカマク炉) がある。
- ・ 2020~2030年頃計画しており、その後2050年頃商業炉に移行するシナリオを描いている。

2) 装置及び施設



EAST (写真) 及び超伝導コイル開発施設を見学した。大気開放をして真空容器内作業をしているところであった。超伝導コイル開発施設では、製作した超伝導コイルを試験する設備と実機大のコイルがあった。EASTで使用した超伝導コイルは、すべて、ここで試験した。

(3) 中国科学技術大学 University of Science and Technology of China, USTC

谷口淳子、奥野剛史、金野智浩

合肥(Hefei)の市街にある中国科学技術大学 (University of Science and Technology of China, USTC)を訪れた。



Yang Jie 教授が学内を案内。Yang 教授は USTC の中日交流委員会の委員長である。応接室にて Chen Chusheng 教授 (Vice President) が、USTC の概要の説明をした。

- * 設立は 1958 年。
- * 合肥という市は、国土の広い中国にて、北京や上海といった大都市から同じような時間でアクセスが可能。
- * 通常の大学は中国の教育省に属するが、USTC のみ中国科学院 (Chinese Academy of Science) に所属。
- * 1350 人のアカデミックスタッフ (463 人の full professors を含む)、7400 人の学部生、8200 人の大学院生がいる。
- * ある調査によると中国で第 3 位のハイレベルの大学である。
- * 学部卒業生の進路は、1/3 が就職、1/3 が中国の大学院、1/3 が奨学金を得て海外の大学院に進学

また、早期 (天才) 教育にも力を入れており、1978 年以降 16 歳以下の大学入学生を受け入れている。この制度は現在までずっとおおむねうまくいっており、卒業生には 100 人 (統計をとった 1978-1994 年のこの制度の出身者の 1/8 程度) の海外での大学の faculty members がいる。

次に、大学の博物館を見学。USTC の歴史や、現在の高い研究教育活動状況を示す。

最後は、学内の**合肥微尺度物質科学国家実験室 Hefei National Laboratory for Physical Sciences at the Microscale (HFNL)** を視察。

中国科学院だけではなく、教育省、科学技術省、および自然科学基金からもサポートを受けて、物理、化学、物質、生物、情報などの最先端の研究教育を実施。

2003 年末に設立した新しい組織でキャンパスでもひときわ目立つ約 15 階建ての研究所である。

量子物理学、原子物理学、材料科学、表面物理学の 4 個の研究室を視察。いずれも世界最先端の装置を用いて最高水準の研究が行われている。

Pan Jianwei 教授 (左写真) の研究室では、数え切れないほどの鏡を複雑に配置して光量子コンピューター (写真下) の研究を行っている。



毎年 Nature や Science に多数の重要な論文を発表。USTC は教育および研究などの面で、中国第 3 位、すなわち世界でも最高水準の質を示す大学であった。



(4) 科学院での交流

藤田 豊久、矢形 朋由

中国側と現地日本人出席者：

科学院国際合作局：邱華盛副局長、陳維平 亜非処高級業務主管、蔣一琪業務助理、陳海濤業務助理、張清泉業務助理、何若 鑿業務助理

科学出版社：向安全編集長、鄭千里副編集 長

理化学技術研究所：段宣明研究員、金峰助 理研究員

理論物理研究所：周善貴研究員

半導体研究所：楊琳研究員、韓偉華研究員

高能物理研究所：胡紅波研究員、王小龍研 究員、尚雷研究員、李玉峰研究員

地理資源と環境研究所：王岱研究員

国浩律師集団：王小平

大阪大学工学研究科応用物理專業連合教 育博士生 増井恭子

交流は、邱副局長からの歓迎の挨拶に続 き、有山理事長からの挨拶、邱副局長から の日中の科学技術の交流報告、胡研究員か らの高能物理研究所の日中協力研究報告、 向編集長より科学出版関係の日中協力の 現状報告、段研究員からの理化技術研究所 の日中協力研究の感想が述べられた。

その後、自由な意見交換がなされ、記念 品交換と記念撮影の後交流会が行われた。



その後、近くの上海老飯店紫雲殿で懇親 の宴会が行われた。

邱副局長は、過去からの日中科学技術交 流の「歴史」と「日中の関係」、そして「今 後の期待」について話された。「歴史」と

「日中の関係」の話の中では、日本の協力に対する感謝の意を強く表し、「今後の期待」の話では、中国側は、日本と同等、もしくは、それ以上の成果が期待できる旨の内容であった。

胡研究員は、高能物理研究所の過去、現在、未来の研究内容について話された。強調された内容は、宇宙関係の研究であった。

向編集長は、科学出版社有限責任公司の中国国内と海外でのアクティビティについて話され、東京支局も存在する旨の話があった。

段研究員は理化技術研究所での日中の研究協力の現状と今後について話された。

（5）人民大会堂での路甬祥院長会見

坂田文彦、成川隆則

中国側出席者

路甬祥 科学院院長
 邱華盛 国際合作局副局長
 向安全 科学出版社有限責任公司総編輯
 高福 生命科学院院長
 鄭千里 科学時報副総編輯
 他 14名

中国駐在日本人研究者出席者

北村義吉 東京大学 微生物研究所中
 日聯合実験室 教授
 岩本愛吉 東京大学医科研究所 教授
 増井恭子 大阪大学工学研究科応用物
 理專業聯合ポストク（博士研
 修生）
 松田善衛 東京大学生物物理研究所中
 日聯合実験室 教授
 柳生文宏 東京大学 微生物研究所中
 日聯合実験室 講師
 林光江 東京大学医科所 特任教授

8月20日午後、人民大会堂において路全人代常務委員会副委員長（科学院院長）と当協会理事で元文部科学大臣である有馬理事を交え、当協会訪華団、中国科学院微生物研究所との連携をしておられる東京大学医科学研究所の岩本愛吉先生のグループの方々や、中国で勉強している日本人

留学生が参加し、約1時間の懇談を行った。

また中国側には、中国科学院国際合作局の邱華盛副局長や、日本と関係の深い科学出版社の責任者や科学時報の副編集長、日本に留学して現在中国科学院傘下の研究所で中核的役割を果たし、或は日本との共同研究を推進して、今後の日中科学技術協力の懸橋になると期待される若手研究者などが出席した。

まず路甬祥先生が青年訪華団に対して、日中交流の重要性と、今後の青年研究者に対する期待を述べた後、戦後日中の科学技術交流が再開して以来歩んできた道を振り返った。有馬朗人先生の大きな貢献や、日中科学技術交流協会の果たしてきた役割、更には新中国成立以降の日中科学技術交流を切り拓いてきた茅誠司、有山兼孝、坂田昌一及び橋口隆吉諸先生などの歴史的役割について述べられ、また、毛沢東、劉少奇、郭沫若、方毅などの新中国建設当時の指導者たちの役割にも言及し、「途切れることなく交流が続いてきたことは、設立者及び関係者のたゆまざる尽力によるものであり、その努力があったからこそ両国は発展してきた」と述べた。民間、政府機関を問わず両国で不断の協力をを行い、人材交流・友好事業を進めてきたことに対し、路院長は日本側を高く評価した。

また、路院長は「現在地球規模で直面している水、エネルギー問題においても今後の日中連携は不可欠で、中国の科学技術、学問の成長は、目覚ましいが、持続可能な発展を続けるにはより進んだ日中協力が求められる。世界規模のグローバルな問題を解決するには二国間の強い協力が必要であり、日本と中国という大国が同じ目標へ向けて足並みを揃えるならば、世界に大きな貢献が出来る。今や日中は、共通の課題を抱えており、解決へ向けて目指す方向は一致している」と述べられた。

今回の訪中目的の一つは、若手研究者の交流であった。

中国側参加者は、上記の課題を解決してゆくには、若い研究者の交流が何よりも大切との見解であった。

有山正孝理事長は、建国60年を迎える

中国へのお祝いを表するとともに、今日まで中国科学院の協力を得て長年にわたり様々な事業を展開してきた日中科学技術交流協会の活動を紹介し、30年に及ぶ同協会の日中科学技術協力の成果について報告した。

路甬祥先生は、有山正孝先生と、その父有山兼孝先生の永きに亘る日中友好の努力を高く評価された。

坂田文彦理学部長は、日中国交正常化以前の中国科学院と日本学術会議とが築き上げて来た日中交流の歴史、特に日本物理学会や、湯川秀樹先生、及び父(坂田昌一)の遭遇した様々な困難の歴史、物理学界を中心として切り拓いてきた研究者交流の歴史などについて報告した。

さらに岩本愛吉先生は、日中共同の鳥インフルエンザなど感染症国際研究拠点の現状報告をされた。

これらに続いて、東京理科大学の曾我准教授や、東京大学の文系の学生である成川さんを始め、多くの日本人が発言を行った。

理科大学の曾我准教授は「温故知新」という言葉を引用し、研究者としての気鋭を表した。

最年少参加者の東京大学生成川さんは習った中国語で、今後の日中は一衣帯水であるという認識で双方理解を深め、協力をし、もって科学技術を高めることは、有意義で、今後このような機会がさらに多くなるよう希望する旨述べた。これに対して、路院長は、高く評価した。

他方中国側からも理論物理研究所の周善貴さんを始めとした若い研究者からの発言があり、和やかな雰囲気を共有した。

最後に有馬朗人先生が近年の中国の研究水準の急速な発展と今後の日中科学技術協力関係につき、科学技術界を担う者は技術分野だけでなく、文化面など幅広い交流も重要との見解を示し、また、参加日本人研究者に日本の希望を感じる旨述べられた。

この友好的な雰囲気の中で、路甬祥先生は、自ら筆を取られた「寧静致遠」(誠実でコツコツした努力を続けないと、遠くにある目的に到達することはできない) という書、

を有馬朗人先生に送られ、有馬朗人先生は、「格物致知」(物事の道理や本質を深く追求し理解して、知識や学問を深め得ること) という書を路甬祥先生に送られた。

人民大会堂での会見は、上海・合肥・北京での各研究所や機関の視察を締めくくり、今後の日中協力関係のゆるぎない一歩を踏み出す有意義な機会であると確信できた。



(6) 参加者感想

① 茨城大学 坂田文彦

私は、一研究者として1985年以来四半世紀にわたって中国人研究者と共同研究を行ってきました。1985年といえば、すでに日中国交は回復され、中国科学院及び中国自然科学研究基金委員会と日本学術振興会との二国間協定など、共同研究の基盤整備は政府間で進みつつありました。先人たちによって築かれた日中協力の様々な枠組みを用いて、また中国科学院理論物理研究所の戴元本院士、趙恩廣博士、吳可博士、中国原子能研究院の卓益忠博士、李祝霞博士、吳錫真博士、北京師範大学の王乃彦院士、晏世偉博士など多くの友人を得て、私は研究を楽しみ、中国の文化を楽しみ、日中交流を進めてきました。

個人的に私は、当初より21世紀の科学はアジアの国々、特に中国、日本、韓国、ベトナムなどが支えると思ってきました

し、文化大革命の混乱から立ち直ったばかりの中国をはじめ、日本はアジア各国の西欧に向けてのゲートウェイの役割を果たす必要があると思ってきました。しかし 21 世紀にはいったころから、理論研究では既に対等な立場での共同研究を進める環境が整ってきました。また 21 世紀になって 10 年が経ち、今回の上海、合肥における研究施設の状態を見て、日本と中国とは実験研究においても、対等の立場での協力の時代に入ったとの認識を新たにしたところです。

今回、訪華団の一員に加えて頂き、恐縮の至りです。私の今後の役割は、新中国発足以来の歴史を知る者として、日中交流の歴史を次世代に伝えるとともに、グローバル時代の若い世代がアジア地域での新たな研究交流を深めていくためのお手伝いをする事と考えており、それが叶えられれば望外の喜びであります。

② 茨城大学 高妻孝光

中国においては、深刻な食料事情があるため、イオンビームを利用した品種改良等が盛んに行なわれている。まさに、科学技術を活用した社会基盤の持続的発展をめざしている事業である。

そのような中国には、偉大なる食文化とつながる古くからの嗣業である独特の医療環境がある。そのような伝統的な技術と、新技術がどのように融合し、新しいサイエンスを生み出してくるか、とても楽しみであり、興味は尽きない。一方、日本は、古来より中国と相互作用してきた。相互作用とは、一方的作用伝達の過程をさすのではなく、他者への作用が、自身へも還元されることでもある。摂動を与えることは、与えたもの自体にも変化をもたらすのである。数千年の時を隔てて、互いに摂動し合って育まれた文化的背景、伝統技術等に立脚した新しいサイエンスの開闢は、日中の強い協力によって達成されるのではと夢想する次第である。

③ 電気通信大学 奥野剛史

今回の機会は、私にとって初めての中国訪問でした。すでに論文や国際会議、訪問者や留学生との交流などでわかっていた

ことではありますが、中国の科学技術がまさに世界最高水準にあることを現場でもみることができました。技術の粋を集めて独自の工夫を凝らした最先端の実験装置の数々、熱心に研究を行う研究者や大学院生の様子などを、かけ足ではありましたが垣間見ることができました。

合肥の中国科学技術大学(USTC)では、日本の大学に所属するひとりとして、大学の博物館には興味をひかれました。大学の歴史や以前の偉大な先生方についての展示が、ひとつの建物全体を用いてなされていました。先輩方をきちんと尊敬する姿勢が強く現れていると感じました。また、過去の歴史だけではなく、現在の教授陣や若い卒業生の立派な業績や活躍ぶりを展示しているのも感心させられました。現在の学生を強く励まして、世界最先端の教育研究をリードしていこうとしていることを感じました。

中国の科学技術研究全般にて、若い力を強く感じました。学生たちが頑張っているのはもちろんのこと、指導者層にも若い人が多いように思いました。USTC にて暖かい笑顔で迎えてくださった副学長の Chen 教授も (1961 年生とのことで) 若くみえたとし、博物館では現学長が 1959 年生まれだと知ることができました。

もちろん若いほど良い、ということは決してないとは思いますが、稼動したばかりの上海光源でも、若い研究者ばかりでした。世界最先端の欧米の大学や研究所で学位を取得したり、博士研究員をしている優秀な研究者達が、上海光源の研究者採用の際には大勢応募したり、してくるとの話でした。今回の訪問もひとつのきっかけとして、私自身も中国の研究者との交流や共同研究をよりいっそう深めていきたいと思えます。

④ 東京大学 金野智浩

現在の中国はあらゆる面で黎明期を脱し、飛躍的成長期であることを実感した。全体の雰囲気として訪中初日に到着した上海市は上海万博に向けたインフラ設営が急ピッチで進んでおり、オリンピックに続いて計画的に設備投資していることが

印象的であった。上海光源および中国 EAST では、先進諸国と同様の設備を国産品として製造したことを強く印象づけるものであった。国家プロジェクトで進めたものであり戦略的に国力を増強させていることを実感した。また、短期間のうちにここまで作り上げる中国の国力は目を見張るものがあった。ただし、先進国が抱えている課題と共通するが、今後これらを利用してどのような成果を出していくのが課題といえる。中国はこれらの設備への投資／拡充に続いて、その使用权を広く世界に提供し共同研究の推進を図っている様子であり、今後様々な分野で共同研究が企画されていくことが確実といえる。一方、科学技術を将来にわたって繁栄させるためには人材育成、教育システムは極めて重要である。中国科学技術大学の視察においては、高度な教育システムを戦略的に確立しており将来にわたって優秀な人材の輩出を通して、科学技術の発展を目指していることを実感した。科学院本部での懇談には出版関係の方や弁護士も同席されており、情報発信および知的財産の確保に向けた強い意志が感じられた。有馬先生とともに臨んだ人民大会堂における路甬祥副委員長との懇談では、今後の日中科学技術交流についてより強い連携をもって推進していく決意を覚えた。総じて、現在の中国は日本の昭和から平成に至る繁栄のプロセスをここ数年の間に一気に濃縮し、加速させている感を受けた。その集中力の高さ、加速度的な繁栄は我が国を一気に抜き去るのではないかという畏怖さえ覚えた。今回の訪中で特に実感したこととして、中国国民が将来に向けて希望に燃えていることである。我が国においては、中国をはじめとしたアジア諸国との連携をより一層推進させるとともに、世界をリードする情報発信源となるべく、緊張感／スピード感をもって取り組むことが喫緊の課題であるといえる。今回の訪中は私にとって初めてでしたが、マスコミや報道等で得られる情報とは異なる中国の今の温度／未来への情熱を肌で感じる事ができました。とても貴重な経験をさせて頂きました。あり

がとうございました。

⑤ 東京大学 小田卓司

ASIPP には 1 月に訪問しており、その際にも同じ施設を見学したが、今回は装置を大気開放していたために真空装置内が見ることができた。中国の研究施設を見学する際にいつも感じることだが、どの施設でも研究者は自分達で装置を作り、試行錯誤しながら改良し、完成させる意志を強く持っている。技術としては十分なレベルでないものも勿論あるが、多くの研究者が自信とやりがいを持って取り組んでいる。これらは、自分自身も含めて日本の研究者に欠けている部分であり、そういった点を省みるという意味でも、有意義なものであった。また、我々を案内して下さった女性の林さんが研究のことを含めて非常に理解されていたこと、若い研究者が重要な立場についていること、施設見学等のスケジュールが綿密に練られていたことが、印象的であった。中国を含めて海外から研究者が日本に訪れた際に、同じように有意義で印象的な時間や経験を提供できるように心がけたい。

⑥ JAEA 春日井敦

EAST のプラズマ容積は原子力機構那珂核融合研究所にある JT-60 の約 1/10 である。超伝導トカマクという特徴を有するが、プラズマ性能（プラズマ電流や放電時間、密度、温度など）は、まだ目標値よりかなり低い。自分の研究所内で主要な部分を全て製作しようとする気概には驚かせられるが、目標性能に到達するには、加熱系の整備も含め時間がかかりそうな印象を受けた。

⑦ 京都大学 笠田竜太

中国におけるトカマク研究の中心地ということで、核融合研究に対する意気込みを強く感じた。特に、超電導線を始めとするかなりの部品が、研究所内に保有する工場での内製品であることには驚かされた。実際に、超電導コイル実験装置の脇で、技術員らしき方が何やらトンテンカンと製作したり、学生さんと思わしき集団とともに溶接作業を行っていたりする様子も見られ、研究者をサポートする体制が充実し

ていることが伺えた。我が国の「ものづくり」は、高度成長期から現在に至る間に、ほとんどの場合民間企業に依存していると思われる。それはそれで高度技術社会のあるべき姿なのであろうが、核融合のような長期的スパンを必要とする分野では、民間企業に過度に依存する結果として、いつの間にか技術や知識の喪失が起きてしまう懸念が有る。知のアーカイブたる大学においてさえ、技術体系の連続した蓄積は、人と人の繋がりのみが可能にすることである。研究者や学生と「ものづくり現場」との距離感の違いだけを見ても、彼の国と我が国の今後の方向性の相違を感じる事が出来たのは収穫であった。

⑧ 東京大学博士課程 矢形朋由

中国の科学技術は過去と現在+将来ではまったく違うものと感じた。過去は確かに日本などの協力なくしては前に進めることは困難であったかもしれないが、今後は逆に日本が学ばなくてはいけなくなるのではという一種の「危惧」が芽生えた。これは大変ショッキングな発見であったが、現状の日本の教育、研究を見ると、もっと悲観的、危機的に思わなければならない。

初等、中等、高等教育すべてに問題があると思う。前に進むことも大事であるが、過去を参考にすることも大事で、有山先生や坂田先生、永崎先生の生きた「真剣な時代」をもう一度復活させる必要があるのではないか。そう感じさせてくれた会議であった。先達と一緒に行動できた今回の訪中は大変実りあるものであったと感じる。

⑨ 東京大学 成川隆則

今回の訪中で最も強く感じたのは、「場所の差」と「歴史」の二つの軸であった。すなわち「場所の差」とは、直に中国の科学技術の状況を見に足を運ぶことで見えてくる日本との差異である。現在は様々なメディアが発達しているが、それでも日本にいてはどうしても知ることはできないものがある。それは研究に取り組む姿勢や研究体制など、人と人との直接の交流でしか伝わらず、それでいて相互に最も大きな作用をもたらすものである。他者を知るこ

とで自分を省み、更なる発展の動力にすることの重要性を改めて感じた。

そしてもう一つの軸である「歴史」とは、日中間の科学技術交流の長い歴史である。有山先生、坂田先生、永崎先生とご一緒したことで、現在の発展は過去の尽力の積み重ねであることを実感した。また若手研究者の方々ともご一緒し、将来へ向けての展望も明るいものと確信した。

私は研究者ではないが、将来は研究交流とは別の形で日中間・アジア間のパートナーシップの強化に貢献してゆきたい。

⑩ 事務局 永崎隆雄

私は、1997年に核燃料サイクル開発機構(現日本原子力研究開発機構)の北京事務所にて赴任し、2001年には日本に帰国しました。今回来訪して感じるのは、この間、10年の発展の大きさです。

古びた旧式の実験設備は、最新式のきれいな最新設備に変わり、研究者には自信が溢れています。

裸電球の暗いマーケットは、煌びやかなショッピングに変わり、人民服は、背広やミニスカートに変わり、道路をうずめる自転車は、電動自転車と渋滞の自動車に変わり、のろのろ汽車は、新幹線に変わりました。

しかし、日本の地方都市は、10年1日のごとく停滞しています。憲法も含めて日本は、世界の変化を取り込んでいないように思います。日本のこの眠りを覚ますのは、中国ではないかと思えます。日中は、良きライバルとして切磋琢磨すべきではないかと思えます。良きライバルこそ相互の発展を促すからです。

(7) まとめ 有山正孝

日中科学技術交流協会理事長 有山正孝

冒頭に記した通り、今回の青年訪中団は、中華人民共和国建国60周年、中国科学院創立60周年、中国科学院と日中科学技術交流協会との交流30年という節目の年を記念して、中国科学院の招聘により実現したものである。

この報告書をお読みいただければわかるように、大変密度の濃い、ハードな日程ではあったが、事故あるいは日程上の齟齬も

なく、また団員が体調不良を訴えられることもなく無事に終了したので、主催者としての最低限の責任は果たすことが出来た。さらにこの報告から分かるように、団員の皆さんが夫々有意義な知見を得て満足されているので、今回の訪中は相応の成果を収め、所期の目的を果たしたものと評価できよう。

今回の訪中団は、科学院の提案により努めて若い世代の方々を中心に組織した。日中間の科学技術交流は今、新しいフェーズを迎えようとしている。一方が他方から学ぶ時代は去り、両者が対等に協力して人類共通の問題に立ち向かうべき時代の幕が開きつつある。今回、共に訪中された若い世代の方々の中から、これからの日中科学技術交流の中核として活躍される方が輩出するなら、当協会として、またこれまで日中科学技術交流の発展に微力を尽くしてきた者の一人として、これに優る悦びはない。

最後に、この度の訪中団招聘を企画・立案していただいた中国科学院国際合作局副局長邱華盛先生、並びに上海から北京まで付き添って我々をお世話くださった国際合作局亜非処高級業務主管陳維平先生に心から御礼申し上げる。またご多忙中にもかかわらずご参加いただき、訪問先で積極的に交流を深めてくださった団員各位、並びに各地で我々を歓迎してくださった中国側研究者・関係各位に深く感謝したい。

- ⑧ 科学院研究所訪問交流団
- ⑨ 香港学生交流会
- ⑩ 上海市科学技術協会来日交流団

第6回総会

第6回総会は、2009年6月3日に、JAEA青山にて開催された。

1. 審議の概要と決議結果

① 2008年度事業報告

有山理事長から「2008年度事業報告」の報告があり、審議の結果、第1号議案は、全員一致で承認された。

② 2008年度決算報告

永崎事務局長から報告がなされた。審議の結果、第2号議案は異議無く全員一致で承認された。

③ 2009年度事業計画

有山理事長から「2009年度特定非営利活動法人日中科学技術交流協会事業計画」にしたがって説明がなされ、審議の結果、第3号議案は、全員一致で承認された。

④ 2009年度収支予算

永崎理事から予算書にしたがって説明がなされ、審議の結果、第4号議案は、全員一致で承認された。

⑤ 事務局長の役員報酬

審議の結果、全員一致で承認された。

⑥ 借入金

審議の結果、原案の通り承認された。

⑦ 理事選任

榎本總明理事、坂部知平理事、深津保理事、山本良一理事、若槻雅男理事の5名の理事が退任され、以下の19名が理事として2010年度末まで留任することが承認された。

1 有山正孝、2 藤崎博也、3 山脇道夫、4 紺野大介、5 永崎隆雄、6 有馬朗人、7 安藤亘、8 井形直弘、9 伊藤学、10 井口洋夫、11 岡田雅年、12 上坪宏道、13 小松彦三郎、14 鈴木基之、15 鈴木伸、16 堂山昌男、17 早川典生、18 宮崎清、

第17回理事会

第17回理事会は、2009年5月22日に、日中科学技術交流協会 事務室にて開催され、以下が議論された。

- ① 2008年度事業報告
- ② 2008年度決算報告
- ③ 2009年度事業計画
- ④ 2009年度収支予算
- ⑤ 事務局長の役員報酬
- ⑥ 借入金
- ⑦ 理事の選任

19 山岡亜夫

また監事として菱田一雄監事が病気体調不振により、退任し、1 梶井功氏(留任)、2 榎本總明氏(新任)が監事に就任した。

⑧会員の入退会(敬称略)

正会員:入会 3名(藤田豊久、福田幸朔、岩下奈々絵)

資格喪失者 19名

学生会員:入会 0名 退会 0名

賛助会員:入会 0社 退会 2社5口

5月29日現在の会員数:正会員81名、学生会員2名、賛助会員5社6口、名誉会員2名である。

第18回理事会

第18回理事会は、2009年8月7日に、協会事務所にて開催され、以下が議論された。

①新役員の報告

理事長に有山正孝氏を再任し、理事長は、副理事長に藤崎博也氏、山脇道夫氏を、常務理事に紺野大介氏、永崎隆雄氏を、事務局長に永崎隆雄氏を再任指名した。2年間は、この体制で行くが、後任の新体制を考える時期に来ており、国立大学定年になる理事候補者を探すとの議論があった。

②科学院招待青年訪中団

永崎事務局長から訪中団メンバーと日程が説明され、了承された。

③奨励賞の募集

選考委員長に藤崎副理事長を選任した。

④講演会実施提案

山脇理事より科学院招待青年訪中団の報告会、中国大使館参事官のご講演会、奨励賞受賞者の小講演会、会員の講演の提案がなされ、了承された。

第19回理事会

第16回理事会は、2009年10月7日に、協会事務所にて開催され、以下が議論された。

①科学院招待青年訪中団報告

永崎事務局長より訪中報告があり、有山理事長より有意義な交流で大きな成果を挙げた旨の評価があった。

②上半期報告と下期予定 会計と予算

永崎事務局長から説明がなされ、一部修正することで、了承された。

③ 奨励賞受賞候補選定について

選考委員長の藤崎副理事長から8名を候補として応募を締め切りたい旨説明があり、了承された。

表彰式と発表会は12月22日(火)13:00より学士会館302号室で実施する。

これに先立つ理事会は、11月30日の週に実施する。

④講習会実施提案

山脇理事より講演会講習会の事業として中国語の講座を開くことが提案され、了承された。

目 次

1. 香港專業教育學院學生來日交流	1
2. 上海科學技術協會の來日交流	2
3. 2008年度共同研究等の報告講演会	3
4. 広東省科學技術庁訪日交流團報告	7
5. 科学院招待青年訪中団報告	9
6. 第17回理事会	19
7. 第6回総会	19
8. 第18回理事会	20
9. 第19回理事会	20
